

2.

知識の懐疑

—ウィトゲンシュタインとデカルトの対立—*

この論文には2つの主要な目的がある。第一は、ウィトゲンシュタイン哲学（特に『確実性について』(OC)）に基づいてデカルトが『省察』で示した方法的懐疑を批判することである。その批判によってはじめて、デカルトの懐疑がもたらす知識に関する懐疑論的パラドックスを（解決するというよりはむしろ）解消できることを示したい（§ 1～6）。本論の第二の目的は、逆にデカルトの議論に基づく観点から、ウィトゲンシュタインの議論における致命的な欠陥を明らかにすることである。私はデカルトの議論に修正を施した観点からウィトゲンシュタインを批判し、そこから真正の洞察を抽出したいと思う（§ 7）。

要するに、私は、知識論の領野において、ウィトゲンシュタインに基づいてデカルトを批判し、デカルトに基づいてウィトゲンシュタインを批判することを試みるつもりである。私見によれば、知識論はこの二人の哲学者が示唆する洞察にしたがって改訂されるべきなのだ。本論で私は、ささやかではあるが、その方向に一步を踏み出すことを試みた。

1. ウィトゲンシュタイン哲学によるデカルト的懐疑の批判

認識論的な懐疑によれば、私は今夢見ているのかもしれないし、あるいは培養液の中の脳であるのかもしれない。私は今夢を見ているのではない（あるいは培養液の中の脳ではない）ということ私には知らないという前提（C1）から外界についての知識に関する懐疑論的帰結を導出する議論がある。それについて悲観的な論者は、C1の反駁は不可能だと考えている（e.g., P.F. ストロウソン, B. ストラウド）。他の論者は、C1を直接反駁することを試みた（e.g., G.E. ムーア, H. パトナム, C. ライト）。また、C1の妥当性を許容する一方で、懐疑論的帰結を導く論証において使用される閉包原理（the principle of closure）の否定を試みる者たちもいる（e.g., F. Dretske, R. Nozick）。別の論者（M. ウィリアムズ）は、私たちがそれを許容することも拒絶することもできる認識論的な前提を想定する場合にのみ、懐疑論的論証が真となると主張する。ほとんどの論者は、一方でC1の妥当性を容認しつつ、懐疑論的な帰結を回避することを可能にする戦略を採用する傾向がある。

* この論文は、第22回世界哲学会（ソウル国立大学、2008/08/03）における発表原稿（“Dissolving the Skeptical Paradox of Knowledge via Cartesian Skepticism based on Wittgenstein”）に、大幅な加筆・修正を施したものである。また本研究は科研費（若手研究スタートアップ（課題番号19820012））の助成を受けたものである。

しかしながら、これらの試みは成功したとは言い難い。そして私見によれば、デカルトの懐疑に対する譲歩が不十分であるがゆえにそれらの試みは失敗したのである¹。さらに言えば、彼らの議論における欠陥はそもそも方法的懐疑の遂行におけるデカルト自身の不徹底に由来しているように思われる。この論文の第一の目的は、逆説的に響くかもしれないが、デカルトの懐疑を彼自身の意図を超えて、しかしその懐疑が内包する論理に忠実に適用するときのみ知識に関する懐疑論的なパラドックスを解消できることを示すことである。そして、この議論は『確実性について』におけるウイトゲンシュタインの重要な議論に基づいている。

2. ア・ポステリオリな知識に関する懐疑論的パラドックス

『省察』においてデカルトは、方法的懐疑の次の3つの段階を経て確実な知識、「われ思う」、に至った。[1] 知覚によって獲得された知識に関する懐疑, [2] 夢論法, そして [3] 悪霊の想定, である。このデカルトの論証における欠陥を検討する前に、ステップ [2] および [3] に対応する懐疑論的パラドックスを定式化しておこう。

まず、ステップ [2] に対応する認識論的パラドックス、すなわち、外界一般に関する認識論的懐疑を定式化する。これはア・ポステリオリな知識に関する疑いと呼ぶことができる (SDr)²。S = 「私は机の前に座っている」、Dr = 「私は今夢見ている」、K = 「私は～を知っている」という表記を設定すると、

- (1) $\neg K (\neg Dr)$ (夢論法の結論; C1)
- (2) $K (S \rightarrow \neg Dr)$ (概念に基づく推論)
- (3) $(x) (y) [K (x) \wedge K (x \rightarrow y) \rightarrow K (y)]$ (閉包原理)
- (4) $K (S)$ (仮定)
- (5) $K (\neg Dr)$ ((2), (3), (4))
- (6) $\neg K (\neg Dr) \wedge K (\neg Dr)$ ((1), (5))

ここで、矛盾が導出される。そしてこの段階では、 $K (S)$ がこの証明における唯一の仮定なので、 $K (S)$ が否定されなければならない。したがって、

- (7) $\neg K (S)$

方法的懐疑のこの段階 (ステップ [2]) では、ア・プリオリな知識は懐疑の対象とはなりえない。したがって、ここで論理的な推論に基づかない $K (S)$ を否定することは自然であるように

¹ 本論では、ライトを例外として、ここで言及された論者の議論の欠陥を直接論ずることはしない。しかしながら、本論の議論の本質が理解され、またライトの議論 (脚注7参照) に対する詳細な批判を参照するならばそれらの欠陥がおのずと明らかになるだろうことを期待している。

² 本論ではア・ポステリオリな知識について懐疑論的な帰結を導出する推論を SDr と略記する。

思われる。

後論の理解のために、この逆説的な推論 (SDr) がもつ著しい特徴を強調しておかなければならない。SDr はその結論が私たちの常識と両立しないという性質をもつ推論である。そして次節において提示される推論とは対照的に、SDr はいかなる論理的な欠陥をも含んでいないのである。

3. ア・プリオリな知識に関する懐疑論的パラドックス³

次に、私は [3]、すなわち夢論法の後でさえその正しさを疑うことができない数学、論理学、あるいは認識的な図式に関する知識についての懐疑に対応するパラドックスを定式化しよう。それはア・プリオリな知識に関する懐疑と呼ぶことができる (SDa)⁴。M = 「2+3=5」、Da (x) = 「私は x (x = ア・プリオリな内容についての信念) に関して悪霊に欺かれている」と表記を設定すると、SDr におけるのと同型の推論によって $\neg K (M)$ が導出される。

[SDa: ア・プリオリな知識に関する懐疑の推論]

- (1)' $\neg K (\neg Da (M))$ (悪霊の想定からの帰結)
- (2)' $K (M \rightarrow \neg Da (M))$ (概念に基づいた推論)
- (3) (x) (y) $[K (x) \wedge K (x \rightarrow y) \rightarrow K (y)]$ (閉包原理)
- (4)' $K (M)$ (仮定)
- (5)' $K (\neg Da (M))$ ((2)', (3), (4)')
- (6)' $\neg K (\neg Da (M)) \wedge K (\neg Da (M))$ ((1)', (5)')
- (7)' $\neg K (M)$

しかし、この推論は SDr とは異なって、ア・プリオリな種類の知識 (= M) の否定を導出するので、同じ種類の知識 ((1)', (2)', (3)) もすべて上述したのと同型の推論に基づいて否定されることになる⁵。この事態を回避するためには、3つの前提 ((1)', (2)', (3)) の連言を否定しなければならない。この連言を容認するならば、この推論はいま述べた致命的な結論に至らざるをえないからである。したがって、SDa においては3つの前提の連言が否定される。この意味において SDr とは対照的に、SDa は、その結論 ($\neg K (M)$) だけでなく推論自体が論理的欠陥を含んでいるのである⁶。

³ 私は SDr とは峻別されるこの認識論的パラドックスについて C. ライト (1991) から多大な示唆を得た。

⁴ SDr にならって、本論ではア・プリオリな知識について懐疑論的な帰結を導出する推論を SDa と略記する。

⁵ SDa における "M" を " $\neg K (\neg Da (M))$ " ((1)') " $M \rightarrow \neg Da (M)$ " ((2)') における認識オペレータ K の作用域)、" $(x) (y) [K (x) \wedge K (x \rightarrow y) \rightarrow K (y)]$ " ((3)) に置換すると、それらの否定あるいはそれと同等の命題が帰結する (" $\neg K (\neg K (\neg Da (M)))$ ", " $\neg K (M \rightarrow \neg Da (M))$ ", " $\neg K [[(x) (y) K (x) \wedge K (x \rightarrow y) \rightarrow K]]$ ")

⁶ この事実から、ライトは K (Da (M)) の否定を導く。しかしながら、彼が示すその論拠は薄弱である。(cf. Wright (1991), p.107).

後論を理解するためにもきわめて重要であり、懐疑論批判としてもそれ自体たいへん興味深いので、ここでやや詳細にライトが Wright (1991) で展開した議論の概略を確認し、その困難を指摘しておきたい。三つの前提 ((1)', (2)', (3)) の連言を否定しなければならないことを示したのち、ライトは次のように議論を進める。

a 、三つの前提のうち否定できるのは (1)' ($\neg K (\neg Da (M))$) だけである。

この主張によって悪霊の想定によって疑いの対象となったア・プリオリな知識はその確実性を回復する。というのもア・プリオリな知識に関する懐疑を導く推論 (SDa) の前提の一つが否定されるからである。そのうえで彼は、

β , (1)' の否定から, SDR の前提 (1) ($\neg K (\neg Dr)$) の否定を導くことができる。少なくとも (1) の正当化不可能性 (unwarrantability) を導くことができる。

を主張する。 a と同様の理由により, β によって, 夢論法によって疑いの対象となったア・ポステリオリな知識に対する懐疑をとり除くことができる。

しかし, 私見では a , β , いずれの論証にも脆弱さを見いだすことができる。 a については, ライトは (2)' ($K (M \rightarrow \neg Da)$) および (3) (閉包原理) のそれぞれについて, 彼の外在主義的な知識観 (それ自体は健全であると思われるが) に基づいてその正当性を訴えるばかりである。しかし, 彼は (1)' ($\neg K (\neg Da (M))$) を否定する直接的な論拠を示そうとはしない。つまり (1)' の否定である $K (\neg Da (M))$ を肯定する積極的な根拠を示そうとはしない。消去法的になんとか (1)' の否定に説得力を与えようとするのみなのである。

しかしながら, 彼の立論における最大の困難は β にある。仮に a を根拠づける彼の議論の妥当性を認めることにしよう。たしかに, 三つの前提の中では, 直観的には, (1)' を否定することが最も容易であるように思えるからである。 β を導くライトの議論を検討するさいに留意すべきことがある。それは, (1)' さえ否定できれば SDa がもたらす論理的な困難は回避できること, そして一方, SDR 自体にはいかなる論理的な欠陥も存していないという事実である。

しかし SDR を否定できないならば, 少なくともア・ポステリオリな知識に関する懐疑論は残存することになる。ライトは (1)' に基づいてなんとか (1) の否定を根拠づけることによってその懐疑を克服する方途を探るのである。

彼の議論はかなり込み入っているがその立論の核心は次のように要約できる。(1)' の否定 ($K (\neg Da (M))$) と (1) の肯定 ($\neg K (\neg Dr)$) は論理的に両立不可能であるように思われる。ア・プリオリな内容の信念について悪霊に欺かれていないことを知っているにもかかわらず, 一方で自分が夢を見ているかいなかを認識することはできないというのは奇妙なことだからである。ライトはそこで譲歩してさらに議論を進める。かりに (1)' の否定と (1) の肯定の論理的な両立不可能性を論証できないとしても, それらの両立不可能性の否定を正当化できないということは認めざるをえないだろう。そのことさえ容認されるならば, そこから, 少なくとも (1) の否定ではなく (1) が正当化不可能であることを導くことができることを彼は証明する。そして, そのとき SDR は正当化できない前提を含んで関ることになるからその推論は成立しない, ということになるわけである。

このライトの巧妙な試みに関する私の診断はこうである。 a に基づいて β を論証することが可能になるのは (1)' の否定 ($K (\neg Da (M))$) を積極的に論証できる場合に限られる。そうでない場合 (ライトの場合) は, a の論証と β の論証は完全に独立である。したがってア・ポステリオリな知識に関する懐疑を克服するためには a とは別に独立の論拠を示す必要があるが, ライトはそのような議論を提出していない。

それでは (1)' の否定 ($K (\neg Da (M))$) を積極的に肯定する論拠とはどのようなものであろうか。ア・プリオリな知識たとえば算術の知識について悪霊に欺かれていないことを疑いの余地なく根拠づけることができるのはどのような場合だろうか。それは算術で使用される記号, 例えば「+」の使用規則を指示する意味実 (Bedeutungskörper) が存在していて, かつそれを正しく把握していることについていかなる疑いの余地もない場合その場合に限られる。そのときには, たしかに SDa における三つの前提 (1)', (2)', (3) の中で (1)' だけを否定する妥当な論拠が与えられる ($\therefore a$)。またそのとき「夢」という概念を絶対確実な仕方と把握することが可能となる。したがって私が体験している世界が現実なのか夢なのかの判断に誤りが生じる可能性はない ($\therefore \beta$ の論証)。

しかし, ライトが (1)' の否定 ($K (\neg Da (M))$) を導く論拠はそのような積極的なものではない (『哲学探究』の規則論は意味実体の存在を決定的に批判したのであり, (1)' を否定するための積極的な論拠を提示することが不可能であることを示したのである。そしてこの論文および彼の他の著作においてライトが規則論の妥当性を認めていることに疑いの余地はない)。 (1)' を否定するために彼が依拠できるのは, SDa がもたらす論理的な困難を回避しなければならないという消極的な論拠である。そして, その困難は (1)' を否定しさえすれば問題なく回避できる。したがって私が体験している世界が現実なのか夢なのかの判断に誤りが生じる可能性はない ($\therefore \beta$ の論証)。

SDa がもたらす論理的な困難に依拠して, その前提の一つ (1)' を否定することが可能になるとすると, その

4. ウィトゲンシュタインに基づくデカルト的懐疑

本節では、ウィトゲンシュタインの議論に基づいて方法的懐疑をその論理的含意の限界まで遂行し、それによって知識の懐疑論的パラドックスを解消することを試みたい。デカルトによる懐疑が不十分なのは次の点においてである。もし悪霊の想定が「 $2 + 3 = 5$ 」のようなア・プリオリな知識を疑うことを可能にするならば、絶対確実な知識とみなされる「われ思う」を導出する過程において使用される推論や語の意味について悪霊の欺きを想定することもまた可能だということである⁷。したがって、「われ思う」でさえ疑いの可能性をまぬがれた絶対確実な知識ではありえないのである。

それでは、論理的に可能なあらゆる疑いを回避する絶対的に確実な知識は存在しないのだろうか。この間に対する回答はこうなる。「知識」と呼ばれる資格を与えられるものはなんであれ、言語において表現可能でなければならず、そして原理的にはいかなる語の使用も悪霊による欺きの可能性をまぬがれることはできないのだから、論理的に可能なあらゆる疑いを回避する知識は存在しえない。こうして、知識に関する議論はここで袋小路に至るように思われる。しかし実際には、この地点までデカルトの懐疑を遂行してはじめて、私たちは知識についての生産的な考察を開始することができるのである。そして有名なウィトゲンシュタインの洞察はさらなる探究のための重要な手掛かりを提供してくれる。

もしすべてを疑おうとすれば、何かを疑うことさえできなくなってしまうだろう。疑いのゲームそれ自身は確実性を前提としている (OC § 115)。

私たちはこの考察からいかなる教訓を抽出するべきなのだろうか。それは「論理的に可能なあらゆる疑いを回避する確実な知識はたしかに存在する」というものではありえない、というのも上述の議論はそのような主張にはいかなる根拠もありえないことをすでに示したからである。私たちがこの考察から導出できる教訓は次のように条件法的なものとなるだろう。「なんらかの言語的な行為（例えば疑うこと）が成立するのは知識（あるいは認知）が存在する場合に限られる」。しかしながら知識が成立するための規準はデカルト的なものではありえない。なぜならデカルトの認識論的規準は知識が成立する余地を許容しないからである。つまり、もし知識が現

ことによって SDa の論理的困難は完璧に回避される。したがって (1)' を否定するそれ以外あるいはそれを超える論拠を提示しなければ、SDr の (1) を否定することは不可能なのである。しかし、ライトのように『探究』規則論の妥当性を認めるならば、SDr の (1) を否定する別の論拠を示すことは不可能であるように思われる。したがってライトは、SDa がもたらすア・プリオリな知識に関する懐疑を回避することだけで自足せざるをえないのである。

もっと強く決定的に批判するなら（そしてその批判の蓋然性は高いように思われるが）結局ライトの議論から導出可能になるのは三つの前提 ((1)', (2)', (3)) の連言の否定だけなのである。なぜなら彼はその前提のうち (1)' だけを否定する積極的な論拠を提示していないのだから。そして (1)' を否定する積極的な論拠は先述したように規則論がその可能性を決定的に批判した意味実体の実在とその確実な把握に訴える以外にないと思われるのである。

⁷ 方法的懐疑についてのこの種の批判は、例えば、飯田 (1987), p.77 に見出される。

実に存在するならば、あるいは知識の存在を否定できないならば知識の非デカルト的な規準が、私たちの言語ゲームに導入されなければならないのである。あるいはより正確には、すでに導入されているのでなければならないのである。

この教訓の意味すること、また、先述の議論からそれをどのようにして導出できるのかを確認しよう。方法的懐疑をその論理的な含意の限界まで遂行することによって、私は論理的に可能なあらゆる疑いをまぬがれる確実な知識は存在しえない（ $= P_0$ ）と結論づけた。しかしここで一つの疑問が生じる。それではこの帰結（ $= P_0$ ）は何なのか？それは知識ではないのか？私たちがその命題（ $= P_0$ ）を導出する際に依拠した推論の規則やその推論において使用される語の意味（ $=$ 規則）についてもまた悪霊による欺きを想定できる。したがって、私は

私は P_0 を知らない。（ $= P_1$ ）

と結論できる。もちろん、同型の議論に基づいて P_1 についても

私は P_1 を知らない。（ $= P_2$ ）

と結論づけることができる。そしてこの背進過程に終わりはない。

私は P_0 を知らない、ということを知らない、ということを知らない、... ... →

この議論が示しているのは、知識が成立するためのデカルトの規準を採用する限り私たちは実質的な主張をけつして遂行できないということである。こうして、私たちは何らかの認知を知識として容認するかどうかについて留保できない決定を迫られることになる。もしそれを容認するならば、非デカルト的な認識論的規準がすでに導入されていること、あるいは暗黙のうちにもう採用されてしまっていることをも私たちは認めなければならない⁸。たとえある人がデカルトの規準に固執し、完全に沈黙することによってその規準を擁護することを選択するとしても、彼が沈黙している間になんらかの認知を享受しているという事実を否定できないならば、その意に反して彼もまた暗黙のうち非デカルト的な規準を導入しているとみなさざるをえないのである。

そしてたしかに、私たちの選好とは無関係に認知は生起しているのだから、私たちはデカルトのそれとは異なった知識の規準の存在を認めなければならない。そしてこれこそが先に引用したウィトゲンシュタインの叙述から抽出できる最も重要な示唆なのである。

⁸ この事実は知識に対するデカルトの規準が日常的な言語的交流においていかなる役割も果たすことができない、ということの意味してはいない。この事実から帰結するのは、デカルトの認識論的規準が、暗黙のうちにあるいは明示的にか、認知演算子として最も外側（最も左側）に位置することができない、ということだけである。この点に関するより詳細な説明は、例えば脚注 13 を参照のこと。

5. 回帰する日常の知識

それでは私たちの言語ゲームにもうすでに導入されている、新しい、そして本質的に非デカルト的な認識論的規準とはどのようなものか？この点においてもウイトゲンシュタインの示唆は重要である⁹。その規準は、彼の議論に基づいて、次のように規定できる¹⁰。

- (1) ある特定の信念についてその根拠あるいは証拠を示すことができる。
- (2) その根拠あるいは証拠に対立する証拠が存在しない。
- (3) その信念の否定あるいはそれと両立しない信念の受容を支持するいかなる証拠も存在しない。

たとえば、私は、自分が二つの手を持っていると信じている。この信念を疑う人に対して私は自分の手を示すことができる。もちろん、これらの手が、私が意識を失っている間にすり替えられた精巧にできた模造品かもしれない、というような想定をすることは論理的にはつねに可能である。あるいは、私が知覚している手は、培養液の中の脳が創り出すたんなる幻覚にすぎないと想定することも可能である。しかしながら、「私は二つの手を持っている」という信念と両立しないそうした信念を支持する経験的な証拠はこれまでのところ提示されていない。したがって、私は自分が二つの手を持っていることを知っていると主張することができるのである。

6. 懐疑論的パラドックスの解消

それではこれまでの考察にもとづいて、「知っている」という語の二つの使用を明確に区別することによって懐疑論的パラドックスをどのように解消できるのかを簡潔に確認したい。「論理的に可能なあらゆる疑いをまぬがれているという意味において確実に知っている」ことを意味する「知っている」の使用（デカルトの規準を満足する「知っている」の使用）のことを形而上学的な使用と呼ぶことにする（‘Km’ と表記）。一方、5節でその条件を規定したような「知っている」の日常的な使用は通常の使用と呼ぶことにする（‘Ko’ と表記）¹¹。そのとき懐疑論的パラドックス S_{Da} はつぎのように書き換えられることになる。

⁹ Cf. OC § 4, 93, 117-120.

¹⁰ ここで示す知識の新しい規準は暫定的なものにすぎず、さらなる精緻化と洗練を必要としていることは言うまでもない。しかし、これまでの議論が妥当であるとすれば、新しい規準は少なくとも次の三つの条件を満足しなければならないと言うことができる。

1. デカルトの規準とは異なり、この規準はそれを満足することが論理的に可能でなければならない。
2. その規準が満足されているかどうかを私たちが判断することが経験的に可能でなければならない。
3. その規準は、「知っている」の通常の用法の、すべてではないとしても、ほとんど一致している。

¹¹ ウイトゲンシュタインは「私は『私は知っている I know』という表現を通常の言語的交流において使用される場合のためにとっておきたいのだ」と述べている（OC § 260）。これまでの議論をふまえて私はむしろこう言いたい。「私は『私は知っている』という表現を通常の言語的交流において使用される場合（「日常的な使用」）のためにとっておかざるをえないのである」。

[DSa: ア・プリオリな知識に関する懐疑の解消]

- (1)* $\neg Km (\neg Da (M))$ (悪霊の想定からの結論)
- (2)* $Ko (M \rightarrow \neg Da (M))$ (概念に基づく推論)
- (3)* $(x) (y) [\{Ko (x) \wedge Ko (x \rightarrow y)\} \rightarrow Ko (y)]$
- (4)* $Ko (M)$ (根拠づけられた計算)
- (5)* $Ko (\neg Da (M))$ ((2)*, (3)*, (4)*)
- [(6)* $\neg Km (\neg Da (M)) \wedge Ko (\neg Da (M))$]

$Ko (\neg Da (M))$ が, (2)*, (3)*, そして (4)* から帰結するが, これは $\neg Km (\neg Da (M))$ と矛盾しない。したがって $\neg Ko (M)$ という結論が導出されることはない¹²。この区別を導入するとき, SDaの逆説的な結論 ($\neg ((1)' \wedge (2)' \wedge (3)')$) もまた帰結しない。つまり, この三つの命題は同時に容認できるのであり, そのことは, 知識についてのふたつの意味——日常的な意味と形而上学的な意味——が日常的言語において共存可能であることを示しているのである。

¹² たしかに, $\neg Km (Da (M))$ もまた, 正確には $Ko (\neg Km (\neg Da (M)))$ という形式において表現されるという意味において知識である。しかし, この表記法を採用したとしても懐疑論的パラドックスの解消のために示した先述の議論に不整合は生じない。念のため, 改訂された表記法による推論をここで示しておく。

[DSa2: ア・プリオリな知識に関する懐疑の解消 2]

- (1) $Ko (\neg Km (\neg Da (M)))$ (悪霊の想定からの結論)
- (2) $Ko (M \rightarrow \neg Da (M))$ (概念に基づく推論)
- (3) $Ko [(x) (y) [Ko (x) \wedge Ko (x \rightarrow y) \rightarrow Ko (y)]]$
- (4) $Ko (M)$ (根拠づけられた計算)
- (5) $Ko (Ko (\neg Da (M)))$ ((2), (3), (4))
- (6) $Ko (\neg Da (M))$ (* Ko の削除)
- [(7) $Ko (\neg Km (\neg Da (M))) \wedge Ko (\neg Da (M))$]

* (6) における操作は, Ko の多重使用の場合の削除に関する規則に依存している。それについてここでは詳細な議論は省略するが, 直観的には, その規則に問題はないだろう。

認知的作用子 Ko および Km の有効性を示し, また二つの作用子の関連を明確にするために, ア・プリオリな知識 (“M”) に関する懐疑を導出するもう一つの事例を記しておく。

- (1) $Ko (\neg Km (\neg Da (M)))$ (悪霊の想定からの結論)
- (2) $Ko (Km (M) \rightarrow Km (\neg Da (M)))$ (概念に基づく推論)
- (3) $Ko [(x) (y) [Km (x) \wedge Km (x \rightarrow y) \rightarrow Km (y)]]$
- (4) $Ko (Km (M))$ (仮定)
- (5) $Ko (Km (\neg Da (M)))$ ((2), (3), (4))
- (6) $Ko (\neg Km (\neg Da (M))) \wedge Ko (Km (\neg Da (M)))$ ((1), (5))
- (7) $Ko (\neg Km (\neg Da (M)) \wedge Km (\neg Da (M)))$ ((6))
- (8) $Ko (\neg Km (M))$

作用子 Km は, $Ko (Km (P))$ あるいは $\neg Ko (Km (P))$ という形式においては使用されえないという際立った特徴もっている (あらゆる適格な命題, それが要素的な命題であれ複合的な命題であれ, が P に代入される)。なぜなら Km についてこの形式の使用が許容されるならばデカルトの規準を満足する知識が存在しうることが帰結してしまうからである。前者の形式がデカルトの規準を満足することは明らかである。また, もし後者の形式 ($\neg Ko (Km (P))$) を使用することが可能ならば, その経験的な否定つまり前者の形式も必然的に可能になってしまうのである。

7. デカルトによる言語ゲームの批判

これまでの議論において、私は、ワイトゲンシュタインの洞察から獲得される観点に基づいてデカルトの方法的懐疑を批判的に考察し、デカルトの懐疑がもたらす懐疑論的パラドックスの解消を試みた。ワイトゲンシュタインによる批判の本質は、1)、もし方法的懐疑についてその論理的な含意をあますところなく展開するならば、論理的に可能なあらゆる疑いをまぬがれる絶対確実な知識は存在しえないという結論に至ること、2)、もし、1) が述べようとしているテーゼそれ自体を含めて何らかの認知が存在することを認めるならば、知識についての本質的に非デカルト的な規準 (= Ko の規準) がすでに適用されている、あるいはすでに導入されていることを私たちは認めざるをえないこと、である。

デカルトは、Km の規準を満足する知識——われ思う——が存在すると信じたため、方法的懐疑の過程において知識の資格を付与されなかった種類の「知識」に規準 Km を適用する際、困難に直面せざるをえなかった。そして結果的に、彼はその意図に反して知識についての懐疑をもたらすことになった¹³。しかしながらワイトゲンシュタインは、方法的懐疑をその論理的含意の極限まで遂行するとき、規準 Km を適用することは不可能となり、逆説的に、懐疑の解消が可能となることを示唆するのである。しかし、そのことは、デカルトの懐疑そのものがまったくの無意味、あるいは他の「メカニズムと何の結合関係もない空転する歯車 (PI § 270)」であることを意味してはいない。たしかに規準 Km は私たちの言語実践の究極的な水準においてはいかなる役割も担ってはいない。しかしながら、それは規準 Ko の作用域において残存し続けている。こうして、デカルトの懐疑がもたらす洞察は、哲学的議論としてのその有効性を失うことはけっしてないのである¹⁴。

しかしワイトゲンシュタインはデカルトに対して一点の曇りもない勝利をおさめたのであろうか？ 論理的に可能なあらゆる疑いをまぬがれる絶対確実な知識は本当に存在しないのか？ 私は、一見して素朴な観点から、ワイトゲンシュタインに対する反論を方法的懐疑のプロセスを辿り直す仕方でも試みたい。

私は、今、ジョン・ケージの *Works for Piano & Prepared Piano, Vol.2* の 13 曲目のトラック *Three Dances for 2* を聴きながらパソコンのキーボードを叩いている。これは確実な知識なのか？ そうではありえない。私は夢を見ていて、現実にはベットに横になって眠っているかもしれないからである。あるいは、私は培養液の中の脳であって、それらの映像や音は幻覚にすぎないのかもしれない。そのとき私が知覚している映像や音は確実な知識ではありえない。それらは現実の世界の出来事と一致していないからである。またたとえ一致することがあるとしてもそれはたまたまでしかないからである。しかし、*Three Dances for 2* の音を聴いていると思っているという私

¹³ ここでデカルトとライトの議論の関係と差異を明確にしておきたい。ライトは、ア・プリオリな知識に関して、SDa がもたらす論理的欠陥から悪霊による欺きを想定することの不可能性 ($K (\neg Da (X))$) を導出することを試みる。つまり、彼は、ア・プリオリな知識に規準 Km を適用できると考えたのであるが、一方、デカルトは、方法的懐疑の過程においてそのほとんどすべてを規準 Km の適用範囲から除外したのである。そしてライトはア・ポステリオリな知識に規準 Km を適用しようとする際に深刻な困難に直面することになったのである。

¹⁴ Km と Ko の関係については脚注 13 におけるかなり詳細な議論を参照のこと。

の信念は絶対確実な知識ではないのか？答えはまたしても否定的なものとならざるをえない。悪霊が私を欺いてそう信じ込ませているだけかもしれないからである。悪霊が欺きの呪縛を解いたとき、私はこう言うかもしれない。「私は *Three Dances for 2* の音を聴いていると信じていたが、それは間違っていた。実際には、私は *The Perilous Night 5* の映像を見てると信じていたのである。」

しかし、まだ次のような反論の余地が残されている。それがどのように表現されるとしても——「私は *Three Dances for 2* の音を聴いている」であれ、「私は *The Perilous Night 5* の映像を見ています」であれ——私はその言語的な表現を使用することを可能にしている質あるいは体験の存在を私は疑うことができるのか？

この種の反論の痕跡をとどめているデカルトの批判の可能性を追求するためには、悪霊の想定のもとでさえ絶対確実な知識が成立するための条件を考察しなければならない。何らかの知識が絶対確実であるためには、なによりもまず、悪霊の欺きの影響が不可能なものとして除外されるのでなければならない。それゆえ、(1) その知識の意味は、任意の記号の使用——その使用が公共的になされるのであれ、私秘的になされるのであれ——によって理解されてはならない。なぜなら、音（語の発音）や映像（語を構成する文字）のような記号が使用される場合にはいつでも、悪霊の欺きが介入することが可能だからである。さらに、(2) その知識は何らかの認知的内容をもっていなければならない。いかなる認知的内容もないならば、それを知識と呼ぶことはできないからである。そしてもし何らかの知識がこの二つの条件 (1), (2) を満足するならば、それは私秘的でなければならない。言い換えると、その知識はその所有者以外のだれにも知られえないのでなければならない。なぜなら、その知識が条件 (1) を満足し、したがって記号の使用に基づくことができないことを前提とするとき、他者にその知識を伝達することは不可能になるからである。語の発音や文字の筆記といった言語的記号であれ、表情や身振りといった非言語的記号であれ、記号の使用は知識の共有に不可欠である。しかしながら誤謬の可能性のない知識は、その成立においていかなる記号使用にも基づかないことを要求する。こうして、たとえ誤謬の可能性のない知識が可能であるとしても、それは私秘的にのみ成立しうるのであり他者とは共有されえないということが、第三の条件 (3) となるのである。

不可謬の知識が成立しうる条件とは、要するに、(1) その知識の意味はいかなる記号の使用なしに理解されえなければならない。（この条件が満足されなければ、悪霊の欺きを逃れることは不可能である）。(2) その知識は特定の認知的内容をもたなければならない。（さもなくば、それはそもそも知識ではありえなくなる）。(3) その知識の意味は私秘的である。（(1) からの帰結）

この三つの条件を満足する知識が成立しうるという仮定のもとで、その知識の意味の理解を可能にする言語を「私的言語 D (PLD)」と呼ぶことにしたい¹⁵。

¹⁵ ウイトゲンシュタインがその不可能性の証明を試みた私的言語 (PLW) は次の特徴によって定義できるように思われる (cf. PI § 243)。

1. その言語の記号は、その言語の使用者に知られうる直接で私秘的な感覚を指示する。
2. それゆえ、その使用者だけがその言語の意味を理解できる。

では、PLDは不可能なのか？（PLDの定義にしたがえば、この問は「不可謬な知識は不可能であるのか」という問と同値である。）それに対して、私はこう答えざるをえない。PLDは可能である、なぜならPLDの実例は現実に私に与えられているのだから、私に特定の記号を使用することを可能にする私私的な質あるいは体験は、その記号のすべての私の使用につねに伴っている。私は、悪霊の欺きがその質あるいは体験に介入するという可能性を想像することさえできない。だから、私は、その私私的な質あるいは体験の意味を、記号の使用によって表現できていないのである。さもなくば、悪霊が介入する余地が残ってしまうからである。さらに私は、この質あるいは体験がなにがしかの内容をもっていることを疑うことはできない。

私はいま述べたことを確信している。しかしながら、その議論によって、PLDそして不可謬な知識が可能であることが証明されたのだろうか？そうではありえない。その理由を次に示そう。

PLDが私に現実に与えられているという上述の私の主張は、あらゆる人がそれを理解できる仕方です。つまり、文字という記号を使用して表現されていた。そして、他者はそれを対立する、完全に異なった二つの意味において解釈することができる。

第一の解釈は、PLDの実例がこの私にとって存在している、というものである。第二の解釈は、PLDの実例がこの私にとってではなく、PLDの実例が存在しているという私の主張を理解したまさにその人にとって存在している、というものである。

PLDの実在についての上述の私の主張に同意する人たち、また同意しない人たちのいずれにとってもこの二つの解釈は論理的に可能である。ただし、PLDが可能であることのより効率的な証明を提供するのは、二つの解釈のいずれを採用するにせよ、私の主張に同意してくれる場合である。なぜなら私の主張に同意してくれない場合には、私の議論を妥当な証明として利用するには、彼らの反論に論駁するという課題が追加されるからである。しかしながら、私の主張の妥当性に対するより有利な場合が現実化するとしても（そしてその蓋然性はとても高いと思われるが）、私はPLDの可能性をけっして証明することはできないのである。

以上の理由から、二つの解釈のどちらを採用するにせよ、私の議論を理解する人がそれに同意する場合を検討することにしたい。それに先立って、PLDの存在についての私の主張における重要な事実を指摘しておきたい。PLDの実例が私に示されているという私の主張は、論理的な推論から導出されたのではなく、経験によっているにすぎない、という事実である。この主張は、ある意味で、知覚に基づいてなされる「私の研究室にはふたつのパソコンがある」といった主張と同じカテゴリーに属している。たしかに私は、PLDが存在するために満足すべき三つの条

PLWは記号の使用が不可欠であるという事実によってPLDと明確に区別される。それゆえ（ワイトゲンシュタインの批判にもかかわらず）たとえPLWが可能であるとしてもその意味がPLWによって理解される知識は不可謬ではありえない。なぜなら、PLWによって理解される知識が悪霊の欺きをまぬがれることは不可能だからである。

この点においてPLWはPLDと本質的に異なっている。しかしながら、ワイトゲンシュタインの私的言語論を次のように解釈することは可能であり、蓋然的ですらあると私は考えている。すなわち、ワイトゲンシュタインが、真に論証しなかったのは、PLWの不可能性ではなく、PLDの不可能性である。と、紙幅の都合上、この主題についての詳細な論究は別の機会に譲ることにしたい。

件を論理的推論に基づいて導いた。しかし、私はその条件から PLD の存在を演繹することはできないのである¹⁶。

この特質に留意しながら第二の解釈の場合を検討しよう。ある人 M が私の議論に同意し、彼自身にとって PLD が存在していることを疑うことができないと主張したと仮定しよう。しかし、私が彼のその主張について言うことができるのは、PLD が自分自身にとって存在していると M は信じているということだけである。PLD が M にとって存在している、と私が主張することはけっしてできない。M にとっての PLD の存在は論理的な推論ではなく経験に基づいているからである。そして M にとって存在する PLD は、現実私にとって存在していないからである。ここで述べているのは、PLD が M にとって存在するかどうか私は検証することができないということではなく、PLD が M にとって存在している、と私が主張することは論理的に不可能だということである。なぜなら、もし私が、PLD が M にとって存在していると主張できるとしたら、私は M とは別に存在することができず、私が M でなければならなくなってしまうからである。したがって、彼の私の議論に対する同意に基づいて、彼は PLD の存在を信じていることを私が結論することができるとしても（そしてこの結論は疑いなく妥当であるが）PLD の存在についての結論を引き出すことは不可能なのである。

次に第一の解釈における場合を検討しよう。ある人 M が私にとって PLD が存在していることに同意すると仮定する。しかしながら彼が主張できることは、PLD が私にとって存在していると私が信じているということだけである。彼は PLD が現実私にとって存在していると結論づけることはできない。というのもそのような主張は私自身からしか発しえないからである（つまり、もし彼がそれを主張できるならば彼は私以外の誰かであることはできなくなってしまうのである）。

以上の二つの解釈の場合の検討に基づいて、PLD、すなわち、絶対に確実な知識が存在するという私の経験的な主張は、その証明に最も有利な状況を想定したとしても、証明することは不可能である、と結論づけることができる。

それでは、PLD、つまり不可謬な知識はやはり不可能なのか？この間を考察するために先述の二つの解釈について、私の主張にとってより不利な状況を想定してみよう。ある人は、私の議論を第二の仕方で解釈しそれを否定するかもしれない。この場合、例えば M は PLD の彼自身にとっての存在を否定する。実際、他者によるこのタイプの主張は私にとって真である。M が私にとっての他者であるかぎり彼の PLD が存在することは不可能だからである。しかし少なくともこの場合、私の PLD の可能性は否定されていないのだから、PLD の不可能性が帰結することはありえない。一方で、他者 M が私の議論を第一の意味において解釈しそれを否定する場合は困難をもたらすように思われる。M にとって私は他者にすぎないので彼は私にとっての PLD の存在を否定するのである。しかしながら、この場合においてさえ PLD の不可能性は証明され

¹⁶ ある意味で、デカルトは絶対に確実な知識、すなわち PLD の存在を論理的推論に基づいて導出することが可能だと信じていた、とすることができる。

えない。なぜなら PLD（私がそれだけを理解できる唯一の私的言語）はその存在を私に示し続けているからである。私はそれを他の誰にも示すことはできないが、この論文のこの節のこの文のこの文字を書いているいまこのとき、私はその存在を肯定せざるをえないのである。

本論が解釈するワイトゲンシュタインは、PLD の不可能性、したがって絶対確実な知識の不可能性を証明することが可能だと信じている。しかしもしこれまでの議論が妥当ならば、ワイトゲンシュタインはこの信念において誤りを犯していると言わなければならない。なぜなら彼の主張に対する反例—PLD—は現実はこの私に与えられているからである。そして、私見では、デカルトが悪霊の想定をも凌駕する不可謬な知識の存在を確信したとき、彼のその信念は、他者が理解できる論理的推論、にではなく、むしろ PLD の存在に根拠づけられていたのである。

しかし、逆の観点からすれば、デカルトは、PLD の可能性、したがって不可謬な知識の存在を、だれもがいかなる論理的困難もなく理解し肯定できる仕方で証明できると信じている点において誤ったのである。彼は不可謬な知識—われ思う—の存在を論理的推論に基づいて証明できると信じている。しかし本論では、ワイトゲンシュタインの洞察から抽出した観点に基づいてこのデカルトの議論に致命的な欠陥があることを示した。不可謬な知識の存在の主張は、論理的推論にその根拠をもつことはありえず、ただこの私の存在だけが支えることができる経験的な主張としてのみ成立するのでなければならない。そしてたとえ他者が二つの異なった意味においてこの私の主張に同意するとしても、先に述べた理由によって、PLD の可能性そして絶対確実な知識の存在を私が証明することはできないのである。

繰り返すが、PLD はその可能性と存在を私に示し続けている。しかし、他者がこの主張を、彼ら自身の観点から、あるいは私の観点から、PLD が存在するあるいは存在しうることを意味していると解釈し、同意するとしても、デカルトの意図に反して、私は PLD すなわち絶対確実な知識が現実にも可能であることを証明することは決してできないのである¹⁷。

¹⁷ もし PLD すなわち不可謬な知識の存在を証明できるならば、そのときその知識は私秘的でしかありえないとしても、Km の肯定的な使用の可能性が確保されることになるだろう。したがって、Km と完全に区別される規準として Ko を導入し、それによって懐疑論的パラドックスを解消するという本論の論拠（これは、本論が 6 節で示したことに他ならない）は根本的に批判されることになるだろう。しかしながら、本節では PLD の存在を証明することが不可能であることを示した。つまり Km を肯定的に使用する可能性を証明できないのだから、6 節における議論がその妥当性を損なうことはないのである。

【参考文献】

- [1] 飯田隆『言語哲学大全 I 論理と言語』, 勁草書房, 1987.
- [2] Dancy, J. *An Introduction to Contemporary Epistemology*, Blackwell, 1985.
- [3] Descartes, R. *Meditations on First Philosophy*, in *The Philosophical Writings of Descartes*, Vol. 2, tr. by J. Cottingham et al., Cambridge UP, 1985.
- [4] Dretske, F. *Perception, Knowledge and Belief*, Cambridge UP, 2000.
- [5] Moore, G.E. *Philosophical Papers*, George Allen & Unwin, 1959.
- [6] Nozick, R. *Philosophical Explanations*, Oxford UP, 1981.
- [7] Putnam, Hilary. *Reason, Truth and History*, Cambridge UP, 1981.
- [8] Strawson, P. F. *Skepticism and Naturalism: Some Varieties*, Routledge, 1985.
- [9] Stroud, B. "Review: Epistemological Reflection on Knowledge of the External World," *Philosophy and Phenomenological Research*, vol.56. No.2, 1996, pp.345-358.
- [10] Stroud, B. *The Significance of Philosophical Skepticism*, Oxford UP, 1984.
- [11] Williams, M. *Unnatural Doubts: Epistemological Realism and the Basis of Scepticism*, Princeton UP, 1996.
- [12] Wittgenstein, L. *On Certainty*, tr. by G. E. M. Anscombe, D. Paul, Blackwell, 1969.
- [13] Wittgenstein, L. *Über Gewißheit*, Ludwig Wittgenstein Werkausgabe Band 8, Suhrkamp, 1989.
- [14] Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations*, tr. by G. E. M. Anscombe, Blackwell, 1958.
- [15] Wittgenstein, L. *Philosophische Untersuchungen*, in Ludwig Wittgenstein Werkausgabe Band 1, Suhrkamp, 1984.
- [16] Wright, C. "Scepticism, Dreaming: Imploding the Demon," *Mind*, vol.100, 1991, pp.87-116.
- [17] Wright, C. *Rails to Infinity*, Harvard UP, 2001.